

令和5年度卒業論文
江戸時代の北海道におけるワシの分布および人との関わり
池田圭吾
要旨

本稿では、江戸時代の歴史資料に記載されたワシの種の同定を行い、当時の北海道におけるワシの分布や生息状況、人との関わりを当時の史料に基づいて明らかにすることを目的とした。

本稿で対象とするワシは日本で8種が記録されている。このうち、オジロワシ属のオジロワシ *Haliaeetus albicilla* とオオワシ *H. pelagicus* は、北海道東部で多くの個体が越冬するが人為的な餌資源への依存が課題となっている。これらの海ワシの生息・越冬分布についての調査は1980年代から行われ情報が蓄積され続けているが、それ以前の分布に関してまとまった記録はほとんどない。しかし、今後の北海道におけるワシの保全について考えるうえでは長期的な分布の変遷や人為的な餌資源に依存する以前の江戸時代における生息状況を把握することが重要である。また、海ワシは同じく北海道に生息するシマフクロウやタンチョウなどの希少な大型鳥類に比べ、歴史的な分布を復元する取り組みが遅れている。本稿の取り組みを通じて、ワシの過去の分布復元を行うことで、ワシの保全に寄与することができる。

また、江戸時代のワシに関する従来の研究では、史料に記載されたワシは単に「鷲」あるいは「鷲羽」として扱われ、その生物としての側面は十分に検討されてこなかった。本稿では、史料に記載された「鷲」を生物としてのワシとして同定することで、ワシの種による利用方法の違いを明らかにし、人との関わりを詳細に明らかにすることを試みた。

調査は主に江戸時代の歴史資料を対象として、本草学・博物学に関する史料や、江戸時代の北海道について記した地誌や紀行、場所請負関係史料、藩政史料などからワシに関する記録を収集した。これらの史料は刊行本のほか各種データベースを用いて収集した。

本稿の内容は、江戸時代の歴史資料におけるワシの同定（第1章）、江戸時代の北海道におけるワシと人との関わり（第2章）、江戸時代の北海道におけるワシの分布（第3章）の3部で構成される。

第1章では、江戸時代の北海道における「鷲」の記録を生物のワシとして解釈するための基礎情報として、江戸時代の歴史資料に記載されたワシの同定を行い、名称と種の対応関係を明らかにすることを目的とした。本草学・博物学のほか矢羽に関する史料に記載された名称について検討した後、蝦夷地（北海道）におけるワシの名称について検討を行った。ワシに関する17の名称を検討することで、名称と種におおよそどのような対応関係があるのか明らかにした。しかし、一部の名称は、ほかのワシと混同されることや複数の種を指すこともあり、現在とは異なる分類がなされていたことが確認できた。

第2章では、ワシの種に着目して、江戸時代の北海道におけるワシと人との関わりを詳細に明らかにすることを目的とした。ワシ羽の交易や献上・奉納、アイヌや和人によるワシの狩猟・飼育の実態についてワシの種や地域による違いを明らかにした。

第3章では、江戸時代の北海道・千島・樺太におけるワシの分布や生息状況を明らかにすることを目的とした。江戸時代全体を通じたワシの記録の分布を整理することで、ワシは

江戸時代の北海道・千島・樺太の各地に分布していたが、オオワシはオジロワシよりも北方に生息していたことを明らかにした。また、江戸時代後期（特に1810年以降）におけるオジロワシとオオワシの越冬状況とオジロワシの繁殖状況について地域ごとに検討を行い、特に、北海道東部の内陸の河川におけるオジロワシとオオワシ越冬個体数や個体数の変動の可能性について考察した。千島では越冬期の生息状況、樺太では夏季の生息・繁殖状況について明らかにした。

本稿では、オオワシの具体的な個体数の推測や、北海道東部でのワシの繁殖状況、ワシの個体数減少の要因、本州のワシの分布や人との関わり、ワシとトビ・ミサゴとの混同については考察に至らなかった。本稿で達成することができなかったこれらの点を今後の課題として提示した。